

保田與重郎の萩原朔太郎論

—— 酣燈社文庫『萩原朔太郎詩抄』 ——

東 典 幸

—

昭和戦前の詩人のうち、三好達治と西脇順三郎と中野重治という流派の異なる作風をそれぞれ代表する三人が、萩原朔太郎には深い敬意を払っていた。朔太郎の影響力の大きさと幅の広さを示す一例である。このことはしばしば言及もされてきた。ほか、詩人だけでなく評論家も加えれば、保田與重郎を挙げることができる。すると、左派から右派まで、古典主義からモダニズムまでのすべてを網羅する顔ぶれがそろったことになる。

ただ、保田と朔太郎については、あまり深く研究されてはこなかった。しかし、保田の視点から読む萩原朔太郎は独特で、一般的な「口語自由詩の完成者」という朔太郎像

とは異なる。もとより、晦渋な文体で知られる保田の評論であるから、読みとるのは簡単ではない。いまここで彼の朔太郎論を再読してみたい。

その前に、朔太郎は保田をどう考えていたかを見ておこう。

朔太郎が伊東静雄を高く評価したことは、よく知られている。『わがひとに與ふる哀歌』を激賞した力作評論を「コギト」に寄せるのが一九三六年のことだ。この縁で朔太郎と保田は出会ったのだろう。この年十一月五日丸山薫宛書簡に、「今京都に来て居ます、淀野君と保田君の案内で旧家の庭を見物して帰らうと思ひます」とある。さらに同月十七日伊東静雄宛書簡には、「保田君とは数日の旅行を共にし愉快でした」と書いている。この京都行がきっかけ

けになったのだろう、朔太郎は保田の著作を読み始めたようだ。翌月神保光太郎宛書簡には、「保田君の『詩人と英雄』もよみました。少々難解の文章ではあるが、あの詩的精神の高邁さには感嘆しました」とあり、続けて、「同君から勧誘されて、小生も佐藤春夫と共に浪漫派同人に加入しました」と書いている。「浪漫派」が「日本浪漫派」であるの言うまでもなからう。

もともと、萩原朔太郎は「コギト」や「日本浪漫派」に好意的だった。一九三五年二月「生理」の「詩壇時評」に、「『コギト』は最近になつて始めて寄贈を受けた雑誌であるが、善い詩人の多く集まつてゐるのに驚いてしまつた」とある。「全体としての詩精神が非常に高邁で好い」と述べており、これが「英雄と詩人」の読後感につながつたようだ。朔太郎にとつて保田は「日本浪漫派の一人」という認識だつたことになる。

この「詩壇時評」はさらにこう続くのが見逃せない、「この雑誌に集つてゐる諸君のポエヂイは、全体として本質的に僕の詩字と一致して居る」。「コギト」や「日本浪漫派」の登場が朔太郎を力づけたことは疑いない。志を同じくする若い詩人たちの台頭について繰り返し言及した。次

のような手放しの賛辞を若手に投げかけるのは、「コギト」と「日本浪漫派」に対してだけである。

浪漫主義の精神は、それ自ら「詩精神」そのものである。そこで日本に浪漫派の運動が起つたといふことは、日本の文壇に詩精神が勃興したといふことである。僕等の詩人にとつて、正にこれは「萬歳！」の三唱に値する。(日本浪漫派について)¹⁾

朔太郎のこの高揚が最も露わな一文が「最近の詩壇」である。²⁾「最近になつてから、僕は漸くまた詩壇に新しい興味と希望を持ち出して来た」と書き出す。続けて、かつての自分がいかに詩壇の流行に反し、孤絶していたかを、「僕は、常に殆ど全詩壇人から一敵国のやうに見られて居た」とまで書く。被害者意識が過剰なのは彼の文章の特徴としても、プロレタリア文学やモダニズムといった昭和初期の流行が、朔太郎に疎外感を味わせたのはわかる。「青猫」の模倣が詩誌の投稿欄にあふれた大正時代は過去の栄光になつていた。³⁾

ところが、と朔太郎は書く。

この頃になつて、漸く僕の正義が詩壇に理解されて来た。次第に後から出る若い人々が、僕の言葉と精神とを知り、詩の正しい方角を模索するやうになつて来た。

ここに言う「若い人々」がどの集団を指すかは明示されていないが、「コギト」と「日本浪漫派」が念頭にあつた、と考へて間違いないだろう。ほか、同様の発言は「認識第一歩の現詩壇」にもある。⁽⁴⁾

今や漸く、詩壇が正しい認識に目醒めて来た。そして最近、漸くその「芸術」と、その「詩精神」とを、二つながら正しく具備するところの、真の本物の詩が現はれようとしてゐるのである。詩壇は認識第一歩を卒業した。真の開明期はこれからである。

こうした例を挙げていくときりが無いが、特に「目醒める新人」からは、自分と「コギト」や「日本浪漫派」がこの新しい波を生んだのだ、という自負が読みとれる。⁽⁵⁾「我等の詩壇は今やその長い暗黒の闇から醒め、漸く新しい希

望の光を、前途の空に見るやうになつた」と現状をまとめ、次のように書く。

昭和十一年度の詩壇は、この意味に於て最もエポックメーク的な詩壇であり、闇黒から光明への、夜明け前の歌を表象した詩壇であつた。そしてこの機運を招致したものは、過去数年に互る筆者（萩原朔太郎）の詩論の外に、雑誌「コギト」による保田與重郎、亀井勝一郎等の多くのエッセイと、そのいはゆる日本浪漫派の文壇運動が、特に最も多く貢献した。

最後に「現代詩壇総覧」に触れておこう。⁽⁶⁾一九三六年の詩壇について、「詩雑誌」「詩人と作品」「詩論」「訳詩」「散文詩」「社会的事件」に項目を分けて、詳しく紹介した力作である。「詩雑誌の権威的代表」として「四季」と「歷程」の二つを挙げ、それぞれを高く評価しながらも、欠点として、前者は「詩精神の逞しさがなく、お上品にすぎ、インテリの病癖の薄弱性を曝け出してゐる」、後者は「イメージの色彩に乏しく、詩想の内容が単純で、しばしば詩としての貧困を感じさせる」、と苦言を呈している。

対して、「コギト」については、紹介字数こそ前述二誌には劣るが、次のように絶賛されている。「昭和十一年の文壇に於て、新しい詩精神を呼びあげた唯一の文学雑誌であった。この雑誌の同人は多く皆エッセイスト等の散文家であるけれども、本質的には何れも高邁な詩精神をもつたところの、真の意味での詩人である。こうした待遇の差は詩人評にも露骨で、伊東静雄『わが人に與ふる哀歌』を「昨年度に於て金牌一等賞に値する名詩集」と称揚する一方で、三好達治と丸山薫については「十一年度に於て最も多量の詩を創作し、すくなくとも量の上で最大の活躍をした」などと、皮肉かとも思わせる書きぶりである。

さて、「現代詩壇総覧」で保田與重郎は「散文詩」の項に紹介されている。

「コギト」の保田與重郎、亀井勝一郎、三浦常夫等は、この新生した時代の詩人と呼ばれるべき人々であり、何れも高邁な詩的精神をもつたエッセイストである。特に保田與重郎は、就中秀れた芸術家としての詩人であり、文章そのものが好個の美しい散文詩である。

ただし、日本浪漫派に注目した当初から、朔太郎は保田を高く評価していたわけではない。さきの、「コギト」について「最近になつて始めて寄贈を受けた」とある一九三五年二月の「生理」の時点で言及されるメンバーは、伊東静雄、神保光太郎、藏原伸二郎などであり、保田の名は見えない。この状況がしばらく続く。強く意識するきっかけになつたのは、すでに触れた一九三六年十一月の京都旅行だろう。

二

保田與重郎が私淑した文学者というと、まず佐藤春夫が思い浮かぶ。たとえば、『日本浪漫派の時代』には、「わが国の文学系譜の上から見て、最高とか絶品といふものは、近代ではやはり佐藤春夫先生の御作に決定する」という一言がある。だが、それに劣らず、萩原朔太郎に敬意を払つた文言も多い。伊東静雄を追悼した「伊東静雄を哭す」には、「日本の新詩始つて以来、最も意味のあつた決定的詩人は、萩原さんをおいて他にいない」とある。⁸⁾『日本浪漫派の時代』で数えれば、朔太郎の方が登場回数が多いほどだ。保田の朔太郎観は個性的で、たとえば、あの「南京陥

落の日に」を「感情高なり、しかも悲壯感の氣品に欠くるところのない佳品」と評している。いまは、しかし、次の一節だけ触れておこう。彼が中学三年生だった頃、英語の勉強のために、英語で詩を書いたところ、もちろんつたない作しか書けず、それは「単語だけを並べた叙事叙景で、感情をいふいひ回しなど出来るわけではない」という代物だった。ところが、と続く。

高等学校の終りごろに「詩と詩論」といふ冊子を見ると、そこに私の英詩作法に即したものと思ふやうな詩が並び、それが新詩風を呼号し、狭い詩壇を風靡してゐるかに思はせてゐたのは驚き入つた次第だつた。さういふ当時の詩壇雰囲気の中で、萩原朔太郎のやうな人がひつそくさせられてをられたことが、私の「コギト」、そして私の「日本浪漫派」の原因となる。さういふ途方もない状態を、文学の正道にかへすといふことが私の場合は、目的となりまた原因となつたのである。

すでに述べたとおり、モダニズムの流行した頃の詩壇に、朔太郎は孤絶感をおぼえていた。保田がそれに同情と

義憤を抱いていたことがわかる。朔太郎が「コギト」や「日本浪漫派」の若者を同志と認めたのは勘違いではない。さて、日本浪漫派を代表する保田與重郎の代名詞といえ、ば、「イロニー」である。この語を採用した事情を、保田は「日本浪漫派の時代」で回想している。それによると、「当時は何でも弁証法の時代だつた」。それに反感を持つていた彼は、「ものを内部で考へるなら、イロニーでよいと知つた」という。さらに続けて、「さうすると矛盾といふやうな、弁証法がさらに脳軟化したやうなことはよりも、イロニーといふ方が、時世にふさはしいと思つてゐた」と書いてゐる。

いわゆる「正反合」で知られる弁証法のほか、「矛盾」という語も考慮されている点に注目したい。保田のイロニーはこれまでもよく論じられてきた。ここでは、矛盾によつて表現する論法が志向されていたことだけ確認しておこう。「矛盾」については「脳軟化したやうな」という蔑称が付されているものの、この用語自体は古くさくて「時世」に合わない、ということ、矛盾の概念それ自体は、むしろイロニーの重要な一部だと思ふ。

そして、「矛盾」がなぜ古くさく感じられるか、という

と、これはすでに旧世代萩原朔太郎の用語だったからである。『詩人の使命』巻頭の「詩の本質性について」の第一章は「詩の矛盾性」であり、そこには「詩の本質は矛盾であり、その矛盾性が多いほど、詩人は天才に近づくのである」と書かれている¹⁰。朔太郎にとって「矛盾」の一語が重要であることは、この一例だけで明らかだろう。

その語を保田は「脳軟化」と形容して、代わりに「イロニー」を採用した。これは朔太郎の「矛盾」を蔑称したわけではなく、旧世代の枠から出ようと試みた、と考えたい。問題は「矛盾」の精神ではなく、「時世」だったのだから。朔太郎の「矛盾」と保田の「イロニー」は、むしろ通底する。それは、『氷島』の混乱した語法と、保田の晦渋な文体をつなぐもの¹¹だ。

この点を指摘したのが大岡信である。彼は『萩原朔太郎』の一番最後で両者の類似に触れている¹²。大岡の述べるとおり、朔太郎晩年の『日本への回帰』において、「彼には帰るべき日本の明確なイメージはなかった」と同様に、保田の「イロニーとしての日本」も「すでに現実にはありうべからざるイメージ」であった。つまり、朔太郎の矛盾せざるを得ない日本文化論と、イロニーに彩られた保田の日本

文化論は、『詩の原理』のあの「^{ザイ}現在しないもの」へのあの「^{ガレ}がれ」を共有している¹⁴。これは朔太郎から保田への影響というより、詩精神の近さだろう。なお、朔太郎の晩年のエッセイにはしばしば「イロニー」が現れる。これは保田の影響ではないか。さきの「詩の本質性について」の第三章は「詩人のイロニー」であり、「イロニーとパラドックスとを理解し得ない人々は、詩と詩人を理解し得ない人々である」とある。ほか、この語を連発した例として『日本への回帰』所収の「ダンヂイズムについて」を挙げておく。

エッセイではなく、詩作品にも触れておくべきだろう。もちろん、『氷島』である。三好達治の有名な批判があるこの詩集の不自然で詰屈した語法¹⁵は、やはり保田の文体と通ずるものがある。「虚無の鴉」の結尾の一行「我れの持たざるものは一切なり」について、再び大岡信から引用する。

この「我れの持たざるものは一切なり。」という悲傷において、詩人の「敗北」は完璧である。しかしまた、詭弁に類することを私は書くが、この詩句は、朔太郎が

実際には、「持たざる」ことにおいてこそ「我れ」は「一切」であると叫んでいるように読める（錯覚だが、これは眩しい錯覚だ）点で、詩人の「敗北」の偉大をたたえている詩句だと私には思われるのである。三好達治ならそれを、言葉が「虚勢」を張っていると考えたにちがいないが、精一はい張った虚勢においてさえ、何ものか閃いて詩人の言葉を戦慄で貫き、私たちをはずしく撃つということもまた、実際にあるのである。

保田が『後鳥羽院』で、承久の乱の敗北を「偉大な敗北」とみなしたことが念頭にあるのは言うまでもない。¹⁶ たしかに、「持たざる」ことにおいてこそ「我れ」は「一切」である」という「錯覚」した「詭弁」においてはじめて真意が通ずる、というのは保田も共有した論法にほかならない。後に見るとおり、保田は朔太郎の詩業の中でも『水鳥』を特に高く評価し、何より、深く理解したが、それは彼ならではのことであった。

ただし、戦前の保田が自分の朔太郎理解を、特に詩の解釈においてよく言語化できていたか、はわからない。有精堂『日本文学研究資料叢書萩原朔太郎』を編むに際し、¹⁷ 佐

藤房儀は、保田から三編、「現代と萩原朔太郎」、「詩人の将来」¹⁹、「宿命をよみて」²⁰を収録し、次のように述べている。

保田与重郎の文章は、文学に対する深い理解をもった評論家の論述として見過ごしにできない。彼の論は少々大袈裟すぎる感がしないでもないが、多大の共感を呼びうるものと思う。いかに朔太郎に対し敬愛をこめ、詩人の存在を温かく見守っているかが感じられる。

私は学生時代に、この「研究資料叢書」で初めて保田を読んだ。印象は、空疎な美辞麗句を並べただけの、「少々」どころではない「大袈裟すぎる」だった。佐藤も、「敬愛をこめ、詩人の存在を温かく見守っている」という程度のことしか解説できていない。そう扱われても仕方の無い面もある文章なのである。ただ、数十年ぶりに読み返すと、朔太郎自身が最も理解してはしかなかったであろうことに、当時の詩壇の中でも保田が筆を費やしていたことはわかる。それは、すでに触れた詩壇における孤高の姿である。「現代と萩原朔太郎」はその一点に延々と贅辞を連ねた力作で

ある。

今日の文筆業界にあるものは徳川時代的なものであるか、さなくば商業道德としての市民の実用主義である。この点で萩原朔太郎の示したものは、これら一切の否定であり、否定のための最も能動的な実践である。

反面、朔太郎の作品についてはあまり語らない。他の二編もそれを書こうとした文章ではない。保田が朔太郎の詩をどう読んでいたかがわかるには、戦後を待たねばならなかった。

三

佐藤は「研究資料叢書」に保田の三編を納めるにあたって、「彼の朔太郎に関する論述のすべてである」と言っているが、誤りである。一九五一年に酣燈社から出た文庫本『詩人全書』の一冊『萩原朔太郎詩抄』に保田が「年譜・解説」を書いているのを見落としている。「萩原朔太郎著作年譜並二解題（萩原朔太郎に於ける「慟哭」について）がそれだ。⁽²¹⁾ 保田の朔太郎観を考えるうえで、先の三編とは

比較にならぬほど重要なものだ。年譜としての役割はすでに終えているものの、事項の選択や保田のコメントは興味深い。一例として、「昭和十五年」を挙げると、この年の豊富な上梓を数えた後、「なほこの他に計画中のものとして、「小泉八雲」「日本詩歌論」「女性と文学」があつた」と記し、さらにこう書き足している。

また小生が直接に聞いた話だが、「方丈記」の如き詩編を、近年の世相を題材として作らうと思つてゐると云はれてゐた。さうしてすでに出来上つた一、二ヶ所を暗んじて、聞かせてもらつたこともあつた。しかし小生はそれを記憶し得なかつた。

朔太郎が『方丈記』に熱中した形跡は無い。たとえば、「小泉八雲の家庭生活」に、「徒然草」と合わせて「仏教的無常観によつた『遁世者の文学』」と述べている程度である。⁽²²⁾ ただ、「遁世者」という語については、保田の「詩人の将来」に、「遁世者^{トシセモノ}」という一節があることも思い起こされ、気になるのである。またこれは、他にも用例のある保田らしい語でもある。

さて、朔太郎の詩業のうち、保田が最も高く評価するのは後期である。この『萩原朔太郎詩抄』に、『月に吠える』からは十一編しか選ばなかったのに対し、「郷土望景詩」と『氷島』は全編を収録させた。三好達治の編んだ岩波文庫『萩原朔太郎詩集』を初めとする多くの選集とは、詩観がまったく異なるのだ。²³ 保田は、朔太郎のアフォリズム「老書生」を引き、詩人としての朔太郎はそこに述べられているような「深い人生経験にもとづくあるもの、を描かうとしてゐた」と述べる。そこから「生活実感に迫ってくる真の意味での「詩」が生まれてくる」と、保田は考えていた。このような経験や実感を重視する詩は、技巧や完成度などを考慮しない。一般的な詩を超えた詩になってゆく。それを保田は「慟哭」と呼んだ。「真の意味での「詩」は慟哭に行き着くのである。こう考えた保田が、朔太郎の作風について、「これが「氷島」に於て、つひに極つて、慟哭となつた」と述べるのは、むしろ当然だろう。

保田は独自の思い入れをこめて「慟哭」を使う。代表的な例として『萬葉集の精神』を見よう。²⁵ 保田は、「日本の精神の歴史から萬葉集を見て、二つの頂を人麻呂と家持で代表せしめたい」と考える。そのうち柿本人麻呂が慟哭の

詩人であった。慟哭と嗚咽を保田は対比し、前者を人麻呂に代表させ、後者を高市黒人に代表させた。人麻呂歌「さゝなみの志賀の大曲淀むともむかしの人にまたもあはめやも」の心について、こう書いている。

けだしむかしの人とは、日本の神の心と人間の体がまだ離れてゐない状態を生きた精神と思へばよいと思ふ。人麻呂の慟哭はさういふ思想を思はせるほどに深くはげしく、又黒人の旅情の思想は、あきらかに己の中に古代の神の心をもつた人間の像を描き出してゐる。従つて人麻呂の慟哭に対し、黒人の作はもつとわびしい悲哀の嗚咽ともいふべきであらう。

おそらく、慟哭と嗚咽は強度やニュアンスに大きな違いはあるものの、本質においては似たようなものなのだろう。正直なところ、その程度しかわからない。自分独特の用語を明確に定義して分析的に議論を進めるようなタイプでは、保田はなかった。むしろ、そうした議論から離れようとした。だから、彼の言う慟哭が何であるかは、その語の用例から考えるしかない。すると、まづ言えるのは、慟

哭は理屈を超えた感情の発露である、ということだ。「か
らごころ」を排した、と言えば、より正確かもしれない。
たとえば、壬申の乱のどちらが敵であり味方であり、どち
らに大義が存していたか、ということは人麻呂には問題で
はない。

人麻呂の慟哭は「斎宮の神風」に於て極つたものがあ
つた。それは敵味方の論議や大義追求の術学論を離れ
て、己の涙を河海を乾れほし青山を枯らす天地の慟哭と
一つにしたやうな、すべてみたみわれの悲願の思ひに、
わが皇国の神のまゝなる歴史の精神に身を投じた詩人の
みが、大きく深くしるしとゞめ得た歌である。

もちろん、ただ個人的に泣き騒ぐことは慟哭ではない。
右の引用からもうかがえるように、「国家の危殆と国家精
神の危機を支へるための民族の志と悲願をこめて歌はれた
文学」こそ慟哭に値する。仏教哲学にも儒教道徳にも染ま
らぬ日本古来の民族の意志が、慟哭によつて歌われるの
だ。

萬葉集の成立した日に於ては、すでに異国よりきた思
想もあり、論理もあつて、国家の倫理を樹立する上で、
よく指導的言論思想によつて、国の人倫を述べ得たので
ある。しかし萬葉集に大倭歌を記録したわが遠祖の人々
は、神ながらに生れ出た己を意識して、神ながらに結ば
れる血の意識を論理とする国体精神を歌ひあげたのであ
る。

保田の言う「民族の志と悲願」や「国の人倫」が国学に
育まれたものであるのは、こうした引用を連ねるまでもな
く、周知のことだ。それが稲作に由来することは、前田英
樹「保田與重郎の文学」が強調している。²⁶⁾

近世の国学にあった「志」は、『古事記』『日本書紀』
に記された神勅——米作りによる祭りの暮らしを、終り
ない循環によつて続ける信念から生まれくる。「生民」
の暮らし、その経済についての絶対の自信から育つてく
る。

前田は、「米作りをして共に生きることが、なぜ理想な

のだろうか」と問い、「そこには、植物的な循環によって、動物がその生を養い、全うさせる暮らしの神髄があるからだ」と答える。保田も同じように答えるだろう。さらに前田は書く、「人はこれによって、鬪争、篡奪、殺戮の運命から解き放たれる」⁽²⁷⁾。保田もそう考えたろう。しかし、これは幻想ではないか。弥生時代になって富が蓄積された結果、それをめぐって「鬪争、篡奪、殺戮」が深刻になったのは、まさに稲作が始まったからではないか。この幻想は、過去から現在まで我が国が近隣諸国を政治的あるいは経済的に侵略しているながら自国民は平和的である、と錯覚していられる意識の根底にある。

大岡信が指摘したように、朔太郎の「日本」も保田の「日本」も、幻想の日本である点では等しい。しかし、保田個人がいかに高潔であったとしても、彼の幻想は醜悪である。朔太郎はどうだろう。「南京陥落の日に」を保田が高く評価したことはすでに触れた。『萩原朔太郎詩抄』にも選んでいる。ただ、『青猫』の「軍隊」同様に沈鬱なこの詩の調子にふれるたび、朔太郎の幻想はいま述べた錯覚とは無縁ではないか、という気がしてくる。同時にその沈鬱は保田に通ずるものがあり、彼の醜悪も単純ではないこ

とに気づく。たとえば、次のような発言もまた保田の言葉なのである。

「文明開化」の方針のさすまゝに、日本は「列強」に伍すことを目標とし、それを達成した時、「列強」なみに、アジアに於ける「植民地」を必要とした。思ふにこれはアジアに於て我がアジアの唯一なるが故に、最も不当な罪悪的行為であつた。(第五回終戦記念日を迎へて)⁽²⁸⁾

朔太郎の慟哭に戻る。保田が、人麻呂だけでなく、朔太郎も慟哭の詩人の一人に数えていたのは、『萩原朔太郎詩抄』が初めてではない。「詩人の将来」にすでに次の一節があり、かねてからの保田の朔太郎観であつたことがわかる。

その詩風は、抒情を主体とするが、自主的思想の背景によつて、一箇の沈痛を記した。風土的沈痛とも云はれるが、むしろ日本の慟哭が、奇蹟的に生まれた。この慟哭の原因は、決して身辺卑近のなかにあるものでない。

旧来評家はこの慟哭のさまざまの様相をとつて、西洋風の思想によつて説かうとしたが、一人としてこれを解明し得なかつた。詩人自身の理性的検討さへ、その神性の所産に尚完全には近づくなかつた。これは将来日本文芸はおのづからにして世界文芸である。こゝに於てわれらの詩人は、日本の立場に立ち日本に於て文化を立法する立場の世界文化の序説者である。

朔太郎の詩には慟哭があること、それは個人的な感情ではなく「日本の慟哭」であり、外来の思想では説明できないことが説かれている。保田は朔太郎を「近代の人麻呂」と見なしていた、と言つていいだろう。ただし、人麻呂と異なり、朔太郎は近代の詩人である。日本を代表するだけでなく、「世界文化の序説者」となることまで、保田は期待している。これは後にふれる。このように読むと、「宿命を讀みて」の次の一節も慟哭の詩人と無関係ではないように思える。

異常なものをもつ詩人は少なくないが、彼らは悠久なものへの感傷をもたず、詩の技術をもつ詩人は少なくない

いが、彼らは詩人でない。

慟哭の詩人の感傷は個人的でなく「悠久なもの」との関わりをもち、慟哭と「詩の技術」の巧拙は関係が無い。この巧拙という点に関しては、朔太郎自身の言葉、『氷島』の「自序」と通ずるものがある。

この詩集に納めた少数の詩は、すくなくとも著者にとつては、純粹にパツシヨネートな咏嘆詩であり、詩的情熱の最も純一の興奮だけを、素朴直截に表出した。換言すれば著者は、すべての芸術的意図と芸術的野心を廃棄し、単に「心のまま」に、自然の感動に任せて書いたのである。

この一節は逆に保田の「慟哭」がどのようなかを説明してもいよう。朔太郎にとつて、こうした詩を書くことは、『氷島』の詩語に就いて²⁹で述べているように、『月に吠える』や『青猫』からの「退却」である。これは決して自らを卑下した言い方ではない。保田にも通ずるイロニイとしての退却^{レトリック}なのであり、この言い方には、新しい表現

を獲得した朔太郎の誇りが秘められている。三好達治にそれは伝わらなかつたが、当然ながら保田は理解できた。

以上の保田の朔太郎観は戦後でも変わらない。「萩原朔太郎著作年譜並二解題」で確認してみよう。

保田にとつて、『月に吠える』や『青猫』は新時代を切り拓いた画期的な詩集ではあつたが、「詩的なもの」を書き連ねただけの詩集とも言え、詩そのものを表現してはいない。現在では誰もが書くような凡庸なスタイルである。「詩的なもの」とは、「詩の技術」として誰もが模倣できる言葉づかいである。次の引用の「後期」が「郷土望景詩」と『氷島』を指し、「前期」が『月に吠える』と『青猫』を指すの言うまでもない。

「月に吠える」から「青猫」に於て、おのづからに出来あがつた斬新無類の感覚の詩の、ほとぼり方に共通するものを、後期にも感ずるが、前期の詩は、今日すでに「詩的なもの」として、大方は時代の中へ解消してつてゐる。無数のエピソードが、さういふ役割を終へたのである。

対して、『氷島』は「詩的なもの」を排した世界である。そこにあるのは詩そのものだ、と保田は言う。

「氷島」ほどに悲しい文学の例はない。こゝに「詩的なもの」は一切ない。あるのは「詩」と「詩人」だ。いはゞアジアのそのまゝの姿だ。その悲しさは尋常のものでない。何故詩人が、永劫の寂寥の場、時間の無い風景に立つたか——詩人はそれを歌つた。それを小生らは、解決せねばならぬ。しかしそれはいまや世界的課題だ、我々の時々刻々の目標だ。

右の引用の「永劫の寂寥の場、時間の無い風景」は、朔太郎と保田だけでなく伊東静雄も関わってくる。ここでは、『氷島』が「世界的課題」を秘めているという指摘に注目しておこう。すでに見たとおり、これは保田の戦前の朔太郎論からある指摘だ。戦前の朔太郎論との違いとして、「アジア」という観点が加わっている。「萩原朔太郎著作年譜並二解題」において「アジア」は十九回も連発されて、異様な感を与える語なのである。しかし、これは大きな変化があつたわけではない。近代を超えるという世界史

的課題を日本が果たす、という意欲に変わりはない。ただ、戦後の保田は、日本を一国ではなくアジア全体の代表として考えることが多い。当時の発言を「祖国正論」からひとつだけ引いておこう。⁽³⁰⁾

日本はアジアの高い文明が何なるかを啓発する任務をもつてゐる。それは近代文明の原理の終焉をいひ、将来の人類理想の根底となるものである。

問題は、この「任務」を朔太郎が負えるか、である。もちろん、しばしば極論に走る保田の主張がそのまま朔太郎に適應するはずはない。しかし、後期の詩業から晩年の評論に至る朔太郎の活動を、「慟哭」、「近代の終焉」、「アジア」という観点で読み直すことは可能ではないか。

注

- (1) 「文学界」一九三五年六月。『詩人の使命』所収、一九三七年、第一書房。
- (2) 「椎の木」一九三五年九月。『詩人の使命』所収。
- (3) 『青猫』が当時の投稿詩人に模倣されたことは、『青猫』スタイル周辺」(『国文学研究』一九九四年)に述べた。

- (4) 「椎の木」一九三五年九月、『詩人の使命』所収。
- (5) 「帝国大学新聞」一九三六年十二月十四日。
- (6) 「文学界」一九三七年一月。
- (7) 一九六九年、至文堂。
- (8) 「祖国」一九五三年七月。
- (9) 「東京朝日新聞」一九三七年十二月十三日。
- (10) 「四季」一九三六年十月。
- (11) 一九三四年、第一書房。
- (12) 「近代日本詩人選10」一九八一年、筑摩書房。
- (13) 一九三八年、白水社。
- (14) 一九二八年、第一書房。
- (15) 「詩集「水島」に就いて」(『四季』一九三四年十月)。
- (16) 一九三九年、思潮社。
- (17) 一九七一年。
- (18) 「コギト」一九二七年九月。
- (19) 「四季」一九四二年二月。
- (20) 「四季」一九三九年十一月。
- (21) 酣燈社「詩人全書」については詳しくを知らない。『萩原朔太郎詩抄』巻末の「刊行書目」によると、『白秋詩抄』(藪田義雄解説)、『春夫全詩抄』(吉田精一解説)、『有明全詩抄』(矢野峰人解説)が最初に並び、西洋の詩人や、変わったところでは『梵子カーリダーサ抄』がある。「刊行書目」三十五冊の最後に、「以下続々刊行」と次のような宣伝文が付されている。「本全書は第一部(東洋) 第二部

(西洋)に分ち、東西古今の名家の詩集を逐次刊行してこれを網羅する巻末には特に正確な年譜と懇切な解説または研究評論を附して、一般教養書としては素より、学習教課のテキストとしての便宜をはかつた」。

- (22) 「日本女性」一九四一年九月十月。
(23) 一九五二年。
(24) 「詩神」一九二九年十二月。
(25) 一九四二年、筑摩書房。
(26) 「新潮」二〇一八年九月。
(27) 「新潮」二〇一八年十月。
(28) 「祖国」一九五〇年九月。
(29) 「四季」一九三六年七月。『詩人の使命』収録時は「氷島」の詩語について。
(30) 「祖国」一九五三年一月。

(本学日本語日本文学科教授)